

1. 山スキーの魅力

山スキーの魅力は、適切な表現ではありませんが、白銀のワンダーランド、非日常的な夢の時間・空間ということでしょうか。スキーのことを魔法の乗り物と言う人がいますが、二本の板に乗って、白銀の森や山を自由にかけてめぐるのは、すごく夢があります。また、樹氷原、霧氷、白銀の森、雪山モルゲンロート(朝焼け)など、感動的に綺麗な世界が遊びのフィールドです。人里から離れた雪一色の世界で、日常生活のことなど完全に忘れてしまいます。

山スキーは、すごくクリエイティブな自由な遊びだとも言えます。地形・斜面の向き・天候・時刻によって、どの斜面が快適な雪質かを選んで滑ります。また、地形図を見て、滑って楽しそうなルートやスキーの機動力を発揮できるようなルートを考えます。夏には行けないところも、雪が障害物(川や小さな木や草)を埋めてしまうので行けます。普通の道でないオリジナルルートを行くと、次から次へと課題が生じ、一つ一つ丁寧に処理して行く必要があります。その課程も楽しく、ロールプレイングゲームの主人公になったような気がします。

最近、若い山ボーダーが増えてきました。エリアによっては、山スキーヤーより山ボーダーの方が多くなっています。私とは観点が違うと思いますが、彼らにとっても非常に魅力的な世界のようなのです。

では、山スキーの魅力の具体例を順番に述べて行きます。

多くの人から「板を担いで登るのですか」と聞かれるのですが、実際にはスキーを履いたまま登って行きます。踵が上がるビンディングを使い、スキーの滑走面にシール(前には滑るが、後ろには滑らない。昔はアザラシ= seal の皮を使っていた。)を貼って、クロスカントリースキーのようにしてすり足で歩きます。普通に歩いているのと大差はなく、むしろ普通に歩くより楽です。スキーは不思議な乗り物で、登りも楽しいものです。ちなみに、スキーはもともと雪の森を歩くために作られたものです。

1.1 アルプス大滑降

北アルプスの標高 3000m の山頂から、標高差 1500m 位を一気に滑り降りる大滑降は、最高に気持ちがいいものです。斜度が 20~30 度くらいの一枚バーンが続き、胸がすくような高度感です。ただし、一気に滑り降りる時にルートを間違えると最悪です。注意しないと、ついつい滑っていて気持ちのいい方に行ってしまう。

また、山頂からの 360 度のパノラマ・雪化粧した北アルプスの連山は、いつまで眺めていても飽きません。標高が高くなると、空がぬけるような青空になり*)、その青空に雪山が非常に良く映えます。

このくらいの標高になると、雲の上に出るので、写真のように足元に雲の海が広がっていることがあります。その雲海に向かって滑り降りるのは、気持ちがいいものです。ただし、厚い雲の中に入ると、ホワイトアウトと言って、地面(雪面)と空の区別がつかなくなり、上下左右がわからなくなり、ルートがわからなくなってしまいます。

毎年、滑り収めは、6 月第 1 週に富士山大滑降です。富士山山頂から一気に滑り降ります。4 時間かけて登っても、下りはあっというまに降りてしまいます。山スキーを始めた頃はもったいないと思っていましたが、最近は気前良く一気に滑り降ります。

(*) 空の色は、もともとの光源である太陽光を散乱する散乱体に関係します。可視光の波長より大きい空気中のチリや雲の水粒子による散乱は、ミー散乱といって、散乱特性に波長依存性がなく、太陽光の白色光をそのまま散乱します。したがって、空が白くなります。一方、可視光の波長より小さい大気分子による散乱は、レイリー散乱といって、波長が短いほどつまり青色ほどよく散乱します。標高が高くなると、ミー散乱するような散乱体が減り(空気がきれいなので)、相対的にレイリー散乱が強くなり、空が青くなります。さらに、標高が上がって、空気が薄くなってくると、レイリー散乱体も減ってきて、青がどんどん深く(暗く)なってきます。ヒマラヤの空は本当に青いです。



北アルプスの立山山頂(3003m)からの大展望。270度の大パノラマのうちの30度くらい。はてしなく続くスキーフィールド。ずっとスキーでツーリングしていける。2003. 4. 27



北アルプス立山 東面の大斜面 2003. 4. 27

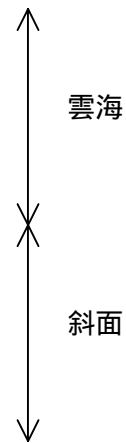


北アルプス剣岳 剣沢 2003. 4. 28

バックのスカイラインから標高差で500mはある。快適な一枚バーン。立山周辺はゴールデンウィークでも積雪10m位。8月でも滑れます。



富士山山頂にて。たまたまショートスキーを使った。2002. 6. 2
前々日に新雪 (6月の新雪!) が 20cm くらい積もり、快適だった。



雲海に向かって滑り降りるのはこんな感じ。
この厚い雲の中に入ると完全にホワイトアウト。この後、とんでもなくルートの間違えた。

1.2 ツーリング

二本の板に乗って、白銀の世界を旅するツーリングは、非常に夢があります。ブナやシラビソの森をぬけていく、景色がどんどん変わる、振り返ると滑ってきたところをはるか遠くに望むことができるのは、楽しいものです。アルプスの山頂に登るのはそれなりに疲れますが、ツーリングは、普通に歩いているのと同じでほとんど疲れません。

ツーリングにはいくつかのスタイルがあります。北アルプスの森林限界より上の稜線に行くもの、八幡平や吾妻など東北のなだらかな山の樹氷原や森の中に行くもの、尾瀬や上高地などをハイキングするもの、スキー場のゲレンデトップから少し登って別のスキー場に滑り降りるものなど。

北アルプスの稜線に行くツーリングは、展望・スケールともに申し分ありません。スキーの機動力をフルに生かして、夏なら2日かけて歩くコースを、スキーで1日で走破したりします。たいてい、夏山の登山道から大きく外れたルートを取ります。ここでは、オリジナルルートを何本でも作れる楽しみもあります。

八幡平や吾妻などの東北の山に行くツーリングは、温泉から温泉へとなだらかな樹氷原を駆け抜けていきます。写真のようなどこまでも続く樹氷原は、晴れれば最高のハイキングですが、吹雪けば地獄で自分が樹氷になってしまいます(本当)。また、森の中を駆け抜けていくイメージとして、志賀高原のタンネの森などが適当かと思います。ちなみに、志賀高原のように、スキー場で雰囲気がいいなと思うようなところは、もともとは山スキーのコースであったところがほとんどです。

尾瀬や上高地などの夏には観光客で賑わう所も、冬になると静かな世界で、白一色の綺麗なハイキングコースとなります。尾瀬の湿原のように夏には入って行けないようなところも、雪があれば入って行けます。夏の喧噪とは対症的な静かさが魅力で、この世界は自分たちだけのものだという不思議な充実感があります。

スキー場のゲレンデトップから少し登るだけで、大部分が下りでも、素晴らしい景色を見ることができるツアーコースもいっぱいあります。たとえば、映画「私をスキーに連れて行って」で有名な志賀高原から万座スキー場へのツアーコースは、下りだけですが、写真のように素晴らしい展望を楽しめます。下りだけのツアーコースの例として、八甲田ロープウェイを利用したコース、八幡平から安比スキー場へのコース、志賀高原から草津温泉へのコースなどがあります。



八幡平のはてしなく続く樹氷原。2003. 4. 7
これは、1月や2月ではなく、4月です。



志賀高原から万座スキー場へのツアールート
このシラビソの森を滑って降りてきます。簡単に行けるところでもこんな展望が見れます。



森の中をツーリングして行くのはこんな感じ。

1.3 新雪

スキーの楽しみの一つに新雪があります。どうも、新雪は中毒になってしまう人が多いようです。

これは、ゲレンデでも運が良ければ味わうことができます。おすすめのスキー場は、八甲田、八幡平、天神平です。かなりの確率で新雪を楽しめます。あと、私は行ったことはありませんが、シャルマン火打や ARAI はすごく良いらしいです。

私は新雪を上手く滑れませんが、雪の中で転げまわるのも、また楽しいものです。ただし、転んだ時に板が外れてしまうと、板がどこに行ってしまったのかわからず、探すのが大変です。最近、スキー板にビーコン(雪崩に埋まった時に、居場所を知らせるための発信器)をつけておけば、板を探すのが楽だということを知りました。ただ、2台で8万円くらいするので、自分で作ろうと思っています。

1.4 温泉、食事

山スキーのフィールドには温泉がつきものです。ほとんどの場合は、温泉をベースにします。充実したスキーの後に、温泉につかり、旨いものを食って、ゴロゴロしているのは至福の時です。雪の中の露天風呂もなかなかのもです。

あるいは、温泉から温泉へと、スキーで温泉を「はしご」して行きます。たとえば、八甲田山の場合は、酸ヶ湯をベースに、今日は谷地温泉、明日は猿倉温泉、明後日は蔦温泉などと温泉めぐりができます。

山スキーの時にお世話になるのは、山の中の一軒宿のひなびた温泉が多いです。雪景色の中の温泉場の長屋というのは、妙な懐かしさがあります。東北の温泉はどこも素朴で、八甲田の酸ヶ湯、谷地温泉、猿倉温泉、八幡平の御生掛温泉、後在所温泉、白布温泉の西屋、桧枝岐のかぎや等がおすすめです。これらの温泉は料金が比較的安めで、酸ヶ湯の場合は、大部屋に泊まれば1泊3000円です。部屋代をケチって食事に5000円くらいかけて、すごくいいものを食べるすることができます。海鮮料理が毎日15品くらい出てきて、一週間滞在しても同じ料理が出てきませんでした。

春になると山菜採りも楽しみの一つです。不思議な人が居て、スキーで滑りながらも山菜を見つける人が居ます。ちなみに、私は山菜のことはよくわかりません。何度教えてもらっても、次の週には忘れてしまっています。途中の休憩では、「しょうゆ」を出して山菜を食べます。私の仲間には居ませんが、天ぷらグッズを持ち歩いていて、山の中で天ぷらを揚げている人も見かけます。

2. 実現方法

興味を持ってやってみたいという方のために。山スキーには、体力、スキー技術、雪山登山技術が必要です。

体力は、テニスなど普通のスポーツをしている方は問題ないと思います。私はあまり体力がなく、テニスをやっても一番早くへばってしまいます。しかし、ツーリング程度なら問題ありません。

スキー技術は、最低でも2級くらい or きちんと外足荷重と荷重移動ができることが必要です。圧雪してない所を滑る技術は、ゲレンデを滑る技術と全く同じですが、正確さが必要になってきます。転んでばかりだとつまらないし、体力の消耗が激しく、怪我をする可能性もあります。きちんと習えば、スキーを始めて20日くらいでこのレベルに到達するはずなので、ゲレンデで十分に練習してください。12月にスキーを始めれば、2月にはできるようになっており、3月に山スキーデビューです。なお、ハイキング程度なら、全くのスキー初心者でも行けます。

雪山登山技術は無くても、山スキーに行く方法があります。ガイドツアーに参加するか、スキースクールのツアーに参加します。たとえば、八甲田や八幡平の各温泉には、スキーガイドが常駐しており、日替わりでいろいろなコースに案内してくれます。また、志賀高原のスキースクールでは、志賀万座ツアーを募集しています。これらには、普通のゲレンデスキーヤーの参加者が多くいます。なお、本格的に山スキーをやりたい方には、やはり雪山登山技術は不可欠で、山岳会などに入って勉強する必要があります。興味がある方は、Appendix A.1 を読んで下さい。

参考文献

1. 北田啓郎編：スキーツアー入門とガイド、山と溪谷社
2. 北田紘一編：日本スキーツアールート集、山と溪谷社
(カラーの写真がいっぱい使われている)
3. 隆旗義道、佐藤篤志：実践山スキー、山と溪谷社

Appendix A.1 雪山登山技術

雪山登山技術を学ぶということですが、これはほとんど雪遊びで、子供が砂遊びをしているのと同じです。雪洞を掘って家を作るとか、雪崩が起きないか安全を確認するために雪を掘って積雪の状態を見るとか^(*)、雪庇を壊してみるとか。本格的な技術としては、アイゼン・ピッケルの使い方を練習したり、ロープワークを練習したり、救助訓練や救急手当ての訓練をします。道でないオリジナルルートに行く場合は、いろいろな障害に阻まれることがあります。強引に通過するために、雪庇を崩したり、氷壁を登ると同じ技術で登ったり、ロープにぶらさがって降りたりする練習もします。さらに、ばかばかしい技術ですが、風が強い所で一人でテントを立てるとか、手袋をしたまま細かい作業をする練習などもします。これらの技術は、まず使うことはないのですが^(**)、必要になった時にできないと命を落とすことになるので、定期的に維持しています。大変なようですが、サバイバルごっこもまた楽しいものです。

(*) 雪崩を勉強すると非常に面白いようです。最近は研究が進み、科学的な観点で調べると、かなりの確からしさで判断できるようです。いつかは、きちんと体系的に学びたいと思っています。

(**) 普通のツーリングでは、雪山登山技術はまず使いません。ちなみに、今まで北アルプスの多くの山頂から滑り降りましたが、アイゼン・ピッケルを一度も使ったことはありません。

雪山登山技術は、良いリーダーのもとで習う必要があります。私の山の師匠は、技術の凄さもさることながら、危険を本能的に察知する能力が凄い人です。すごく状況を良く見ている、判断能力に優れた人で、ヨーロッパアルプスの氷壁や三大北壁を危なげなく登ってしまいます。この人についていれば安全だという、絶対的な信頼をおける人です。すごく緻密で、行動の一つ一つにきちんと論理があり、私たちがおかしいことをしているのを目ざとく見つけて罵ります。私も師匠のまねをしてヨーロッパアルプスの氷雪壁を登りましたが、当然のごとく敗退し、痛い目に遭いました。あらためて師匠の凄さを思い知り、それまで師匠の傘のもとで遊ばせてもらっていただけだと悟りました。

余談

余談ですが、私が山スキーを始めるようになったきっかけは、父親とその友人たちです。私が本格的にスキーと山を始めたのは就職してからですが、子供のころよく父親とスキーや山に遊びに行きました。ホームグレンデは、兵庫県の日本海側にある神鍋スキー場でした。子供の目から見て、父親はすごくカッコよく(今でも)、あこがれの人で、いつも父親のあとを追いかけていました。私が小学生の時は、父親は三十代前半で今の私よりも若く、まだ遊びたい盛りだったのでしょう。それから15年経って、私が父親の夢だったヨーロッパアルプスの山をいっぱい登るようになり(昔は海外登山は難しかった)、父親を連れて行ってあげたかったのですが、父親の方が夏の北アルプスも怪しいくらいに登れなくなってしまいました。50歳で登れなくなるのはちょっと残念ですが、父親と違い、私はきっと60歳になっても懲りずに雪山を駆けめぐっていると思います。